雪国の建築

十日町市は日本有数の積雪量（例年平均 2メートル以上）を誇り、11月から4月にかけて雪がずっと地面に積もっている。一晩で 50 センチ以上の雪が降ることも珍しくない。この積雪量とともに生活することで、雪国の建築様式が形成され、冬に適応した生活を送るための珍しい特徴が生まれしてきた。

最も顕著な違いは、十日町の屋根である。多くの家の屋根は急勾配で、庇（ひさし）が通常よりも大きく出ている。これにより、雪が滑り落ちやすくなり、壁から離れて積もるようになる。雪が（屋根にも壁にも）積もると、その重みで建物が倒壊する恐れがあり、非常に危険だ。切妻屋根の場合、中央の棟に細く鋭い突起があることがある。この工夫は、屋根の結合を切断し、雪を横に落ち滑らせる。また、屋根の勾配を 2 つではなく 1 つにすることにより滑る雪はすべて 1 つのエリアに誘導される場合もある。最近では、雪が積もらないように屋根にヒーターが設置され、手作業による雪下ろしの必要がない場合もある。

雪国の家は、2階に玄関がある高床式住宅が多い。これは、雪が数メートル積もっても出入りできるようにするためだ。このような住宅では、1階は車を風雪から守るためのビルトインガレージになっていることが多い。

農家のような伝統的な建築物は、必然的に木造で建てられてきたが、十日町の近代的な建築物では、いまだに木製の板が、特に外壁に多く使われていることに、訪れる人は驚くかもしれない。審美的な理由で木材を選ぶ人もいるかもしれないが、雪国では木材の性能も高い。例えば、一般的に流通しているスギは耐水性、断熱性に優れ、気温の変化による収縮や膨張にも強いいため、環境にやさしく費用対効果も高い。

その他にも、あまり目立たないが、雪の多い冬を乗り切るために必要な人工的な工夫がある。例えば、日本の信号機は通常、赤、黄、緑の 3 色が横に並んでいるが、十日町市では縦に並んでいる。これにより、雪が積もってランプが見えなくならないようにするために水平面が少なくなる。また、別の例として、建物が密集し、除雪した雪を積み上げるスペースがあまりない地域では、道路沿いにハッチが設置されていることが多い。「流雪溝（りゅうせつこう）」と呼ばれるこの溝は、雪を溶かして流す水を隠している。

十日町の建築は、雪国で生き残るために、何世代にもわたって受け継がれてきた知識を生かしながら、現代的な工夫を取り入れた、冬を乗り切るための工夫に満ちている。